

---

# 手紙

鶴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

手紙

### 【著者名】

鶴

### 【Zコード】

N3132B

### 【あらすじ】

別れたくはなかった。だけでもう別れなければいけない。だから僕は君に言つたんだ。『別れよう』つて……

一緒にいたかった。だけでもう一緒にいられない。

「別れよ」

賑やかだった店内からまるで音が消え去ったように感じた。テーブルに置かれたグラスの中で、カラシンッ、と氷が音を立てる。

「…………どうして？」

呟いた君の声は僕を苦しくさせた。

「…………じめん」

僕は振り絞るように言葉を吐き、席を立った。

見ていられなかつた。君の静かに涙を流す表情など。扉の鈴の音が虚しく響く。空はこんなにも快晴なのに、僕の頬は雨に濡れていた。

『手紙』

「はあっーー？」

ヤケに響く野太い声が食堂を満たす。そりやあ他の学生さんはこちらを見ますよ。

「ダイ、声が大きいよ」

苦笑いを浮かべながら僕が軽く頭を下げる、再び食堂には喧騒が戻る。

「だつてお前……別れたって言わなかつたか？」

「……言つました」

「……美冴ちやんと？」

「…………うん」

（）にいる蔵元 大は僕こと高柳 春樹と高校の時からの友人であり、ご覧の様に大学も同じ。学部は違うものの、たまに食堂で飯

を食べる。

「どうしてまた……」

「…………いろいろあって」

「だーかーらー、その『いろいろ』を話さんかい！――」

また学生さん達が一いつちを見ている。僕はやっぱりただ苦笑いを浮かべるだけだった。

大輪の太陽は憎らしく輝き、音楽科の講堂のそばの大樹は僕等を包み込んでくれる様に影を揺らす。食堂から移動した僕等は講堂そばの芝生の上にいた。

目を開けると聴こえてくる。馴れ親しんだこの場所で聴く演奏。蝉の声にも邪魔をされないそれは、いつ聞いても美しい。ただ一つだけ違うのは、その中にいつもの『音』が足りないこと。

「……で、理由つい？」

ダイの声で僕は目を開ける。枝の隙間から日光が僕を照らす。

「……………パリに行くんだ

「……………は？」

一瞬消えた蝉の声は直ぐに戻ってきた。

僕自身が留学の話を聞いたのは一週間程前だった。  
国際的にも有名な画家の目に僕の作品が止まつた、ということから始まり、そういう留学の話が出てきた。

画家として食べて行こうとしている僕にとっては、留学の話は願つてもない話で。

両親は、あっさりと「承してくれた。我ながら良い親に恵まれた」と思う。

本来ならこのままフランスへ直行したいのだけど。僕にとっては最重要なことがあって。

「……………それで美月と別れることにしたんだ

「いや、意味がわからんねえよ」

「フランスに行くことは何年後にこいつが帰つてこれるかわからんんだ。だから……………」

静かに聞いていたダイは、静かに立ち上がり僕の胸ぐらを掴み無理矢理立せた。

「だから……なんだ？」

「ダ……ダイ？」

「どうせ、『美月を縛りつけておきたくない』とか言つんだひ？」

言葉に詰まる。正にその通りだつたからだ。

「それでお前は本当にいいのかよ……。」

「だつて仕方が……」

「『仕方がない』で済ませられるほどどの関係かよ……。」

「…………」

「好きなんだろ……美月ちゃんの事が……」

蝉の声は既に消えていた。いや、聽こえないだけなのかもしけない。

「…………すまん」

ダイの手から解放される。

「いや、悪いのは僕だから……」

二人の間を抜ける様に風が吹く。草の匂いを含ませながら。

「なあ、春樹」

「…………なに?」

「今からでも美月ちゃんに……」

「いや、もういいよ。結局僕は自分に自信が無かつたんだ。だから  
もう……これでいいんだ」

そう、僕が美月にしてあげられる事はもう無いんだ。一つだけ……  
一つだけしてあげられる事があるとするならそれは……

「僕は遠くから美月の幸せを祈るだけだよ」

さう、愛する君が幸せになってくれればそれで……

初めて出逢つたのはある夏の夕暮れ時。僕は久しぶりに土手で絵を描くことにしていた。

夕焼けは、見ていると暖かくて、だけどなんだか切なくて、だから無性に描きたくなつたのかもしれない。

土手沿いは風が涼しく吹き、野草がそれに合わせて踊る。すれ違う子供は元気よくかけっこをしている。犬の散歩をしている老夫婦もどこか和む。

橋の近くに場所を取り、口笛を吹きながら準備を始める。流石にTシャツのままだと汚れてしまうから、Tシャツに着替えをする。

「あー！！

不意に聞こえた大きな声に、振り返る。

「ねえ、ここ私の場所なんだけどーーー！」

明らかに彼女の土地では無む邪じやうだが口論とかは面倒なため、仕方なく道具を片付けようとする。

「じよ、冗談よ、冗談！！」

何故か彼女は少し慌てて僕を引き留める。よく見るとウチの学校の生徒の様だ。

さらさらのストレートな髪は夕焼けに染まり少し茶色っぽい。大きな瞳にも夕焼けが映っている。整った眉と、スッと伸びた鼻。淡い赤色な唇、白い肌。総合すると、美人さんである。

「高柳君……でしょ？」

「…………ええ」

よほど怪しい目をしていたのだろうか、彼女は笑いながら

「やあねえ、そんなに変なモノを見るような目で見ないでよ。ホラ、この前表彰されてたでしょ？」

確かに一週間程前に絵画コンクールで優秀賞に選ばれて表彰されたっけ。あの時ダイが『春樹最高ー！』とか大声で言つもんだから印象が深かつたのだろう。

「で……どちら様でしょつか？」

「私？私は高嶺 美月、一年D組よ」

「隣のクラス？…………ああ」

ダイに聞いたことがあった。D組の高嶺は名前の通り高嶺の花らしい、告白撃墜者が後を絶たないって話。……確かに美人だが。

「で、その高嶺さんばざつしていいの？」

「えつ？…………えつと、その…………」

何を考えてるのだろうか、顎に人指し指を乗っけてあれこれ言っている。彼女専用の場所なのだから直ぐに答えればいいのに。

「…………そう、コレよ……。」

効果音がつきわづな勢いで田の前に差し出されたのは少し小さめな黒いケース。

「…………なに、コレ？」

待つてましたと言わんばかりに得意そうな顔をしてケースを開ける高嶺さん。中から取り出されたのは美しい銀色。

「…………フルート？」

「ピンポーンーーー！」

フルートに夕日が反射する。彼女同様眩しいくらいに。フルートは吸い込まれる様に彼女の手に收まり、彼女はそっと口づけをする。流れる音は美しかつた。体の内側まで響く音、だけどいつもさいわけでもなく、逆に安らぎを与えてくれる。

フルートを吹く彼女は、本当に楽しそうで。彼女の背後にある夕日が彼女を照らし、それが本当に綺麗だった。

気付けば僕はそんな彼女を描き続けていた。不意に演奏が止まる。

「ちょっと、私を描くなんて止めてよーーー！」

「…………どうして？」

「だって……恥ずかしいじゃない」

彼女の頬は夕日と同様に赤く染まっていた。

「…………夢、か」

美月と初めて出逢つた日の事を思い出していたからだらうか、夢にまで美月が出てくるなんて。

土手で出逢つてからずつと土手に通つてたつけ。あの頃は付き合つてもらえるなんて考えてもみなかつたな。

カーテンを開くと朝日が視界いっぱいに広がつた。……出発の朝だ。

いつもの様に身支度を整え、朝食を食べる。父は会社に行く寸前に握手を求めてきた。握つたその手はとても熱かつた。

母は『頑張つて』と一言だけ言つてくれた。その一言に全てが含まれることを理解して、僕は『ありがとう』と一言だけ言つた。

「迎えに来たぞーーー！」

朝からダイの野太い声が響く。町内の皆様、『めんなさい』。トランクを持ち、玄関を開ける。

「おはよう、朝から元気だね」

「なんだか嫌味に聞こえるが？」

「氣のせいだよ」

トランクをダイに渡して、我が家に向けて一礼をした。お世話になりました、そして行つてきます。

空港には直ぐに着いてしまった。国際便の搭乗口付近では、僕と似たような人達がちらほらいた。

「ホラ、準備出来たぞ」

「ありがと。でも良かったの? ホントに航空費出してもらひて

「まあ俺からのさとやかな留学祝いだ。ほい、航空券。おっと、それから……」

ダイは航空券の他に鞄から封筒を取り出した。

「これは?」

「留学祝いのプレゼント第一弾つてことかな?」

少し怪しい感じがしたけど封筒を持ちの鞄にしまった。

「絵が出来たら送れよな」

「……ダイに似合わないけど」

「何か言つたか？」

「ううん、なにも」

放送が流れる。もう時間だ。

「……じゃあ、また」

「おひ、あつとまた」

最後にハイタッチを交し、僕はダイに背を向けた。後ろは振り向かない。きっとダイは今の僕と同じ様に涙を我慢しているはずだから。

座席に座った後で、ダイに渡された封筒を開ける。中には折り

置まれた一枚の紙、それとお金。

一枚目の紙には殴り書きの様な筆跡、つまりはダイの字で『プレゼント第三弾かな?』と書かれていた。

「…………貧乏人の癖に…………」

涙を抑えながら一枚目を取り出す。表面に『プレゼント第四弾』と、これまでダイの筆跡で書かれていた。次はなんだよ、と思いながら開ける。そこには見慣れた字があった。

「…………美月…………」

貴方に手紙を書くのは初めてですね。付き合つてからこんなに連絡をとらなかつたのも。

ダイ君から全部聞きました。……どうして『待つて』って言つてくれなかつたの?私がそんなに信じられない?

この際ハツキリ言つておきますけどね、私はまだ別れを承諾してませんからね!! そんな勝手な理由で別れるなんて許さないんだからー!だから……だから私をまだ好きでいてください。

私は貴方が大好きです。

文字は所々滲んでいた。そして今、新たに染みを作る。もう僕に涙を止める術は残されていなかつた。

「大丈夫ですか？」

隣の乗客が僕に話しかけてきた。隣の席の人まで心配させるのは悪いと思い、僕は涙をぬぐつた。

「……ええ、だいじょ……」

……は？

「はあああああ！？」

僕の叫びは機内に響き渡つた。

フランスの夕暮れも日本の夕暮れもどこか似たような雰囲気がある。違うのは街並みくらいだろうか。

「いやあ、長かったねえ」

「…………やうですね」

「おおおー、元気がないぞ少年よ」

「…………ドッキリは体に毒だ」

「まあまあいいじゃない、それとも…………いやー」

「…………」

正直反則だろ、「ん。夕日を浴びながら上田遣いで僕を見る美由は僕の心臓を叩き続ける。

機内でいきなり現れた美月。ダイのプレゼント最終弾だとこいつことだ。それから聞いた話では、美月もフルートの勉強の為に留学申請したらしく、とりあえず下見でついてきたそうだ。

「さつてと、早く春樹が住む家に行こ？」

「いや、先にお前の荷物をホテルに……」

「ホテル？予約しないよ」

「…………は？」

「春樹ん所に泊まるんだもん」

「『だもん』って……お前なあ」

美月は髪をなびかせながら振り向いた。

「私を振りうとした罰よ」

「…………すいません」

確かにこちらに非があるので謝ることしか出来ない。僕の言葉に満足したのか、再び振り返る美月。そのままゆっくりと歩きだした。

「…………もつ離れないんだから」

「ん? 何か言つたか?」

「「ひ、ひつん、なんでもないよ」

何故か美月はいきなり足早に道を歩く。人に荷物を持たせておいて自分はとつとと行つちゃうんですか。しかも家だつてわかんないだろうに先に行くなんて。

「…………やれやれ」

もう何度もかわからぬいため息を吐いて、美月の後を追つ。

これから僕達に少し胸を膨らませながら。

(後書き)

久しぶりの投稿でした、いかがだったでしょうか？  
多分今年最後の作品となります。来年はちゃんと連載が出来ればいいなあと模索中です。

評価、批評、アドバイス、お待ちしております。

あと私事ではありますがホムペを開設しました。興味があつたら覗いてやって下さい。作者紹介ページから飛べますので。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3132b/>

---

手紙

2011年1月8日19時59分発行